

Title	序文：古代都市ローマ、そして現代の都市化
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.11, 1997.3 : 1-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3418
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

序文——古代都市ローマ、そして現代の都市化

聖学院大学総合研究所所長 大木英夫

ローマを見ることはいつも深い感銘を与える。ローマ広場（フォールム・ローマヌム）の跡を見て、「なぜローマは滅びたか」というギボンの問いは、誰しもの脳裏に浮かぶのではないか。それは戦慄的な問いである。秀村欣二著『ネロ』（中公新書）は見事な叙述だ。その冒頭に、皇帝ネロの教師であつたセネカが書いた文章が引用されている。

「さあ、この巨大都市の住宅が収容しきれないほどの、群衆に目を向けてごらん下さい。この群衆の大部分は故郷をもたないのです。彼らは自治市、植民地、いやそれどころか、全世界から流れ込んできたのです。或る者は功名心から、或る者は公生活の必要のため、或る者は使節としての責務をゆだねられ、或る者は気ままから、悪事を働くのに都合がよく、獲物が多い場所を求めて、或る者は高度な学問研究を望んで、或るものは見世物のため、引き寄せられたのです。それにまた、或いは交友が、或いは能力を発揮する広いチャンスをつかもうとする熱心さが、人々を寄せ集めているのです。さらに或る者はその美しい容姿を、或る者は雄弁を売り出そうとしているのです。つまりありとあらゆる

種類の人間が、善行にせよ悪事にせよ、高値をつけてくれる都におしよせてきたのです。かりにこれらのすべての人々に『生国はどこだね』と尋ねてごらん下さい。そうすれば、大部分の人たちが、故郷に見切りをつけて、たしかに最も広大で、最も華麗ではあるが、決して彼ら自身のものではない、この都にやってきているのに、あなたは気づかれることでしょうか。セネカの言葉は、現代の東京を彷彿させる、と秀村氏は言っている。

ネロは、このローマのコロセウムの近くの丘の宮殿に住んだ。それは「黄金宮殿」と呼ばれた当時の超モダンな装置を具備したものであった。六四年のローマの大火の後の建築である。ネロは大火の後、区画整理をし、道幅を広げ、建物の高さ制限、共同住宅には中庭を備えしめ、防火対策に彼の私費を投じ、また復興のために（今日の住宅金融公庫を思わせるような）貸付もした。今日人々の感動を誘うローマの壮大な廃墟の中に見いだすのは、その復興後のローマである。

この大火の後の復興は、かえってその大火の責任をネロに帰する風説となつて、新しいローマの街々を吹き抜け、ネロはそれから身を守るために、その責任をキリスト者に負わせ、大迫害となつたことは有名な話である。

古代都市と現代の都市化の現象とはもちろん違ふ。しかし似たところもある。似たところは、ネロのような強大な力なしにあの壮麗な古代都市ローマは造られることはなかつたであろうということである。ネロを引き合いにだすことは、とくにキリスト者にとつては好ましくはない。しかし秀村氏によれば、暴君か英雄か、ネロをどう評価するかは簡単ではないようである。今日直面している課題の重さを思うと、皇帝ネロは教訓的でさえある。ネロは、黄金宮殿が完成した後、「どうやらわたしもこれで人間らしい生活ができる」と言つたそうである。どうして現代の都市化のもたら

した都市的日本人を「人間らしい生活」の場とすることができるか。現代は、工業化をコントロールできないで、ゴミ問題に帰着した。都市化をコントロールできないで、スラム問題に行き着くのではないか。

都市は「自然」に任せてできるものではない。「自然」ではなく人間の「自由」の力の結集によって建設される。その美しさは、そこに自然の美しさを取りこむことを含めて、芸術的な結実なのである。飛行機から見た日本の美しさは、アマゾンの原始林のようなものではない。恐らく何百年もかかって造られた段々畑や水田の田園美である。その田園はほとんどコントロールのきかない都市化によって侵食され、ネロならば焼き払いたくなるのではないかと思われる醜く雑然たる巨大都市に変貌して行く。もし美しい都市ができるとすれば、先祖たちが注ぎだした数百年に及ぶ努力をあらたに結集して、その総力を短期間にこの都市化という社会変動の中に有効に傾注し、この都市化の動きを美しい近代都市の形へと方向づけることに現代の人間が成功したときではないか。

たしかにネロのような暴君では困る。問題は、デモクラシーが、果してその皇帝ネロに匹敵する力を産みだしているか、ということである。デモクラシーのデモはデモス（人民）、クラシーはクラトス（力）である。問題は、その力が正義と知恵を帯びることである。むかし帝王学ということがあった。今日必要なのは「人民の帝王学」ではないか。不幸は、力あるものが得てして正義感に欠け、知恵ある者が得てして無力であることである。ネロも哲学者セネカを教師としてもっている間は良かった。セネカの知恵を失って暴君ネロとなった。われわれの周囲に、埼玉新都心をいかに設定するか、いかに建設するか、という議論がある。そこにも、力と正義と知恵との偉大な結合が求められている。それは大学と行政と経済界との結合の必要を暗示していないだろうか。究極の課題は、セネカがローマに流入する故郷をもたない

人々と言ったそのような今日の人々が、新しい都市の中でアート・ホームになることができるか、ということではないか
と思う。

一九九七年三月